

神秘主義と象徴主義に関する詩壇論争(上)

佐藤房儀

一 論争以前

明治四十二年三月と九月に出版された北原白秋の詩集『邪宗門』と三木露風の詩集『廃園』は、大きな反響をもって迎えられた。詩史上、この二著のもたらした反響に耳を傾けるならば、それは新時代の当来をつげるラッパ音ではなくして、時代思潮の最後をつげるシンバルの響きにもひとしかあった。

二詩集は、薄田泣菫や蒲原有明によって用意された、情緒をうたう手法を完成させた。だが、二詩集の表現しようとした抒情はかなり違っている。『邪宗門』では、絢爛たる言語によって、エキゾチズムや、官能的な雰囲気をつたい上げ、一方『廃園』では、ある種の観念を生みだすための情緒を、思索的な語彙によってうたっている。この差違は詩人の姿勢の根本的な違いから生じた。白秋の詩作法は、文字を記す以前に心の中に詩的な感興が溢れ、内的感情によって引き起された情緒の変化や、情調の揺めきについて書くことを主眼にしている。露風の場合はその逆である。まず前方に詩にすべき観念や思想があり、その明確化とし

て創作行為がある。ゆえに一方の問題は、情趣をいかに言語化するかにあり、他方は言語をいかにして情趣化し得るかにあった。

二詩集が出版される以前から、旧新詩社系と自由詩系の詩人達とのあいだで反目がみられた。白秋と露風が詩壇の中心になり始めると、彼等の下に二つの派閥が生じた。白秋は巡礼詩社をおこし、「地上巡礼」「アルス」といった機関誌を出し、露風は未来社をつくって、「未来」を発刊した。もともと当時の詩壇なるものは、二つの結社でわかれるくらい小さなものであった。白秋と露風が詩壇の大御所的な存在になってゆくと、二人のあとに続いて登壇し、結社を構成した後輩達の反目は一層ひどくなった。露風派のひとりである柳沢健の書いた「輓近の詩壇を論ず」では、二人が並び称される現状を考えながら、一方を真の詩でないときまで述べた。柳沢より前に川路柳虹は、室生犀星・萩原朔太郎・山村暮鳥といった、巡礼詩社の最も中心の人々を貶めている。なにも露風派からだけこのような批判がなされたのではない。室生犀星の感情的な反論もみられる。この大正四年における批評文のやりとりは、文学論争といったものではない。ヒステリックにかっ

てな熱をふき、たがいに牙をむきあって、建設的な何かが生まれる余地はなかった。

当時の詩人達のやりとりを見ると、詩壇も、詩人の心情も狭隘すぎるように思われる。

註1 邪宗門 北原白秋 明治42年3月易風社刊

2 廃園 三木露風 明治42年9月光華書房刊

3 大正四年頃になると、北原白秋や三木露風は大家然としているが、後輩詩人との間に年齢上の差はない。次に論争の中心になった人々の生年をあげておく。

北原白秋明治(以下年号を略す)18年、萩原朔太郎19年、川路柳虹21年、三木露風22年、福士幸次郎22年、白鳥省吾23年。

4 『三木露風一派の詩を放逐せよ』まで 久保忠夫 昭和43年1月「言語と文芸」

二派の反目の様相については、この文にくわしい。

5 晩近の詩壇を論ず 柳沢健 大正4年7月「文章世界」

見かたによつては、論争の発端は右の文であるともいえる。

なお、論争に直接関係する文章の記事は、最後に「論争資料」として一括する。

二 三木露風をめぐる

このよう詩壇の状況の中で、大正四年に三木露風は『露風詩話』を刊行した。これは数年の間に発表した詩に関する随想類

で、自己の詩観を明確な立論のもとに述べたものではないが、彼の立場はかなりよくわかる。

この中で露風は、投書家を直接の対象としながら、白秋達の作品について痛烈な皮肉を浴せている。さらに、当時台頭しつつあった若手の詩人のある人々に対しても、ホイットマンを通過した後に真の詩ができると、忠告をあたえている。前者の言は、もちろん白秋達の欄にさわたつたであらうし、後者は「白樺」を中心にする人々や、新しくおこりつつあった民衆詩派の人々にとつて、けしからぬ無礼な言葉であつたろう。

それならば肝腎の三木露風の詩観はどのようなものであつたのだろうか。

藝術は實際にそのものが表現されなければならない。我々が眞理の追求よりも眞理の生活を理想とするやうに、思想を述べる藝術よりも、藝術そのものが思想でなければならぬ。藝術の生活者といふと妙な言葉だが、享樂主義者の使ふ意味でなく、藝術の上にゆきわたつて自分が生活し呼吸されてゐなければならない。函の中へ入れた石みたいな、生活の思潮がごろっちらと作品に鳴つてゐるやうでは仕方がない。

彼の詩作態度がここにある。あらゆる人間の現実生活以前に芸術がおかれ、詩人は高邁な美的世界の住人でなければならぬ。これでは生活実感をうたおうとする人々にとって不満であり、彼に反対するのも当然であらう。しかしながら、『露風詩話』が上梓された時、直接の反論はなかった。後の論争に加わる人々も、

大部分まいったくの新進詩人であり、反論するまでにいたっていなかった。

大正五年六月になって、白鳥省吾は「詩の庶民的傾向」と題する小文を発表した。これは『露風詩話』の反論ではないが、明らかに対立する立場を証明している。

感動より宣傳へ、孤獨より群集へ、自分一人だけのしみじみとした感動から廣い人類的の感動を表現した即ち詩の庶民的傾向が吾が國の詩壇の一部に明るい光を射し始めた。

このような出だしてはじまる文章であるが、内容的に熟した論になっていない。おそらく省吾自身、『庶民的傾向』の詩というものについて、はっきりした概念をもっていなかったのであろう。だがこの文では、カアペンターやホイットマンに最大級の讃辭をささげて、日本にも同傾向の詩が出てきたことを喜んでゐる。たしかに彼のいう方向への動きが見られた。しかしこのような文章を草しても、当時白鳥省吾は初期作品の傾向によって、三木派の一人であると見られていた。

大正五年八月に露風は、「詩作の傍より」と題した小論を発表した。これは「新しい神秘」と「靈感と形式」の二章からなり、この内題をみただけでも、内容がある程度推測されよう。ここでは次のようにいつている。

現実の事象を精神で感知し、そこに内在する何かを表現するのが詩である。詩の象徴とは、言語と形式によって書かれたものに、現存を超越した意義をつけ加えることである。うたうべき対象は、自然であり人事であるが、それらを感知し認識する詩人の

精神は、時によって様々な変化をおこす。その変化の様相を語ることによって、詩が詩として完成する。ゆえに「詩は心の表象」であり、詩中の物象は情緒として感ぜられなければならない。ひとつの作品は、言葉の意味やイメージといった、言語が本来有する機能以上の、意味ある何かをもつ。それが象徴の本質である。

露風のこの考えは、今日の觀察によってみればあまりに空想的な神秘主義に基づきすぎているように思える。彼は詩人が特別な能力を持った存在であり、詩が世にもまれな神秘を表現できると考えている。詩人は、世間の人々が達し得ない高御座に位置して、下界を睥睨する存在なのである。この見解によれば、白秋などの詩が通俗的な感情に溢れ、詩の香気を著しく損うように思えたのも当然であろう。またホイットマンの詩があまりにも現実的で、神秘性をかいてるように見えたことも理解できる。

同じ八月に、白秋麾下の三羽鴉のひとりである室生犀星が、それとなく、露風の詩を非難した文章を新聞にのせた。犀星は思想的な詩や、観念的な詩を難じ、直情のあふれた素直な言葉で書いた作品を善しとしている。

省吾といい、犀星といい、これらの文章が書かれるようになってからは、難解さがありがたがる風潮が消え、露風に対する批判が可能になってきた証拠である。これはデモクラティックな時代風潮と軌を一にしている。

註1 民衆詩派はまだグループとして発達していないが、次のような詩集がでて、機運をかもしていた。

太陽の子 富士幸次郎 大正3年4月洛陽堂刊

世界の一人 白鳥省吾 大正3年6月2舎書房刊

最初の一人 百田宗治 大正4年6月表現社刊

2 表現の精神 『露風詩話』 論争資料参照

3 註1参照。さらに次のような詩集が出版された。

正義の兜 佐藤惣之助 大正5年1月天弦堂刊

豊民の言葉 福田正夫 大正5年1月南郊堂刊

4 大手拓次・室生犀星・萩原朔太郎が、白秋麾下の三羽鶏といわれた。

三 発 端

三木露風を中心にして、散発的な意見の発表はあったが、論争が起ころほど機が熟していなかった。そんな時「詩歌」誌上で、「詩壇の現状」という特集を行ない、様々な見解を同一組上にのせた。おそらく雑誌の主宰者前田夕暮が、詩壇の沈滞に活を入れるつもりで、若手の詩人達に書かせたものであらう。特集に応じたのは、次のような人々である。

福士幸次郎「詩人と智識」・白鳥省吾「感動の陶醉と自覚」・

室生犀星「現詩壇について感じたこと」・加藤介春「手壇の象嵌細工師」・萩原朔太郎「最近の詩壇について」、さらに川路柳虹の「詩壇の現状」に就て」と題された書翰が見られる。これらの内の何人かが後の論争の中心になるわけで、特集は完全に成功であった。なかでも次に紹介する三人は問題意識が濃厚で、論客の風貌がうかがえる。

福士幸次郎の「詩人と智識」は、当時の詩壇の状態がなんら方

向性をもたず、無秩序であると指摘する。西洋文明の流入の結果、感情や官能の刺激が強くなったが、それにつけても人間が劣悪な方向に向かわぬようにするために智識が要求される。智識を身につけてこそ、人生を逃避せず、愛をうたう民衆詩人が生まれる。個人よりも集団の時代である今日、平民の立場で、詩人は人生の叡智を気付かせる詩をうたわなければならない。幸次郎の文は非常に理解しづらいが、ほぼ彼の根本的な立場は上のようにいえる。

白鳥省吾の「感動の陶醉と自覚」では、詩における神秘と象徴の必要性を説き、現実主義者がそれらを否定するのは、彼等の認識不足のためであるとする。これだけでは前の「詩の庶民的傾向」と、かなり矛盾しているように見えるが、彼は露風のような高踏派ではない。文中から神秘と象徴について述べている所を取り出してみよう。

一草一木でも其の光の光翳や又、永遠に亘つての交渉、それから人間界の些小な出来事でも其の關聯するところを深く知りそれを表現するのは其の（詩人の 佐藤註）天分を定むる所以である。これに依つて見ても事物の眞とは幻像を豊かに感じ神秘を深く味ふ所にのみあるのを知るであらう。

省吾の考えていた神秘は、宇宙の存在についての不可思議さにあると思われる。象徴について書いている所をみると、神秘的宇宙の中で造り出された生命の驚異を、詩の中に盛り込むことであるといっている。省吾は白秋と露風を、ある程度神秘と象徴を実践している詩人とみているが、二人に満足しているわけではな

い。彼の推奨するのは、ヴェルハアレンであり、ホイットマンである。これら外国の詩人の名は前にもあげていたが、彼の神秘感
は生命力を意識することにあるといえよう。同じ文の中で数人の
詩について批評を試みているが、それはおおむねリベラルな詩精
神に基づいたものである。何よりも彼はこの文において、民衆詩
人風な資質と立場を、かなりはつきりさせている。

萩原朔太郎は「最近の詩壇について」で、現状を過渡的なもの
とみ、新しい詩の勃興を願っている。彼の觀察によれば、日本語
によって日本人の抒情を表現し得た詩は、白秋の『思ひ出』を除
いてなかった。『思ひ出』によって、はじめて西洋から輸入され
た詩という形態が日本に定着した。だから詩は、そこを出発点と
しなければならぬ。詩の内容は決して限定されず、何をどのよ
うにうたつてもよい。ただいかに詩人の感情が正しく、強く、深
く、うたわれているかによって作品の出来映えが決定される。そ
うしてみると最近注目される詩人は、室生犀星と福士幸次郎であ
り、この二人あたりから詩が新しくなるであらうという。

以上代表的な三人の意見をまとめた。これ以外に見られる川路
柳虹の手紙は感想風なもので、注意するにあたらぬ。また同じ
雑誌上に、「詩作の傍より」という前月と同じ題名で、露風が感想
文をのせているが、詩に関する中心命題を論じたものではない。
大正五年九月の「詩歌」誌上には、各自の内容がどうであれ、
論争の中心人物がすべて一同に会し、論争の用意が完了したこと
になる。

註1 思ひ出 北原白秋 明治44年6月東雲堂刊

四 三木露風批判

論争の火蓋を切ったのは、福士幸次郎であった。彼は十一月号
「詩歌」にのせた「詩壇毎月評論」で、象徴主義に対して痛烈な
批判を浴びせた。彼は、象徴主義がこれまでの日本の詩壇で最高
の位置にあることを是認しながらも、その欠陥を攻撃する。

併し象徴主義には重大な缺點があつた。それは其の主義が主
観と唯一無二の主観を基調とするので、生活といふものに無
理解になり、新しい永続的な生活を營む努力面がなくなつて
来る。絶えず新しい生命を流出する生活には人間は象徴主義
の如き主観性のみ傾くのでは駄目なのである。のみならず
日本の現在の如く古い文明を新しく壊されて建設時代にある
ものは、物事の完成が顛倒してゐるので、あの言葉の穿さくに
八金しい象徴主義の藝術では忽ち自縛自縛に陥つてしまふ。
象徴主義は日本の今迄の詩の行きつめた絶頂でもあり、その
災ひであつた。

福士の論の主眼は、すでに近代詩が象徴主義を脱して、新しい
形式と詩精神を欲していると言う点にある。象徴主義は行き着く
ところまで行き着き、もはや新生のエネルギーを失つた。現在の
詩人は、そのような過去の残骸に捉われることなく、新たな可能
性を追求しなければならない。それには、より客観的に生活を観
察する必要がある。彼は、詩人が人間生存の基調としての生活意
識をしつかりもち、より謙虚な気持で自己を見詰めることを望ん
でいる。

私は蒲原（有明）氏の後継者とも見るべき三木君の詩を見るのであるが、あんな詩を書いて何になるか。その想を見るものから見させれば實に馬鹿らしい遊戲である。加ふるに其の作品には一種の半透明膜ともいふべきヴェールがついてゐて、言葉から来る純粹さといふものがないのは、蒲原氏の詩と變る所がない。

萩原朔太郎が九月の「最近の詩壇に就て」で、『三木露風氏は既に過去の人である。氏の詩篇はあまりに古典的であつて我々とは交渉がない』と書いていたのを、いっそ語調を強めている。全体としてこの文は、萩原の論究に負うところが多いが、富士の新進の感慨が、類似する考えに接して、強く燃えあがつたのだと見られる。後になって論争に加わつた人々は、相互影響を受けながら各自の考察を深めて行くのだが、富士の影響のされかたは、時によるとかなり顯著である。

さらに富士は、白鳥省吾に対しても反論を加え、『神祕主義は文明人の迷信である』という。この文章によつて富士は、萩原と同一の主張を持っているように見られ、彼等と三木・白鳥とが対立する形になった。

同じ十一月に萩原朔太郎は、『感情』に「日本に於ける未来派の詩とその解説」という文をのせた。そこでは象徴の定義を行ないながら未来派へと論を進め、山村暮鳥の詩を推薦し、暮鳥の作品解説をしている。朔太郎は象徴主義を否定しているわけではない。むしろ、近代詩はすべて象徴詩であるという考えから出発している。彼は象徴を次の如く定義する。

物の概念（物質）を描くことの代りに、物の生命（神經）を描く。

彼のいう「物の生命」とは、本質、実存、存在の意義、といった概念を内に含んでいる。この定義にしたがえば、詩作上の問題は「どの程度まで象徴を取り入れるのが好いか、悪いか」ということに還元され、象徴詩であるかどうかは決して詩の本質にかかわらない。象徴派なるものは「象徴派中での最も極端な象徴派」なのであつて、象徴派を標榜し、象徴詩になるように創作することが誤りであるという。朔太郎の詩作法は、作品の対象となる事物からあらゆる附帶的なものをとりさり、余計な表現を作品にもつてはならないという考えに基づいている。

同じ「感情」の「消息欄」で、朔太郎は詩人同士が新しい道を見つけるために、大いに意見を闘わせる必要があると説き、彼や室生犀星の考えと、柳沢健や川路柳虹の見解が正反対であり、いくらでも論争の相手になるという。すでに九月号「詩歌」で、富士は同じように論争の相手が出てくることを望んでいたが、この朔太郎の文とあわせて、論争の幕は完全にあがりきつた。

十一月の「詩歌」は、『詩壇九人集』として、三木露風・白鳥省吾・日夏耿之介・富田碎花・児玉花外・加藤介春・室生犀星・山村暮鳥・富士幸次郎の作品を一度にのせた。この特集は、前月の「感情」が「現代詩人号」として、十一人の作品をまとめたのに刺激されてなされたものである。この「詩壇九人集」についての批評を、川路柳虹と柳沢健が「詩歌」十二月号にのせ、加藤以下の四人をすべて攻撃した。二人の文は、富士や萩原の願つてい

た論争ではなく、感情的な反論文であった。

翌大正六年一月萩原朔太郎は、「昨年の詩壇を論ず」という文章を「秀才文壇」に発表し、露風をはげしく批判した。露風の詩作態度といい、作品といい、あまりにも古臭く、まったく魅力がない。彼の思想は国木田独歩や島崎藤村から受け継いだもので、もはや新時代の生命力をもたない。そして、要するに露風氏は大正年代における新體詩人である」という。この文章は朔太郎が露風を表面切つて批難した最初で、口調は相当はげしい。これが後の「三木露風一派の詩を放逐せよ」へと発展し、さらに痛烈さを増すわけである。

翌二月、福士幸次郎は現今において詩が曲り角に来ており、日本人の心情を表出する作品のないことを嘆き、現代文化を代表する詩人の登場を望んでいる。彼は語をついで、新しい詩は、古語によつてではなく、口語によつて書かれなければならず、詩人はそのために努力すべきだという。ここで古語の詩人というのが、三木露風達を指していることはあきらかである。

翌月になると福士は、「文章世界」で詩壇の不毛を責める。彼は詩壇の中心勢力の保守派（象徴詩派）と、それ以外の進歩派とを名をあげてわけている。分類については、後に朔太郎がこれを参考にしながら一層細分しているの、そちらでくわしく見ることにする。福士が象徴派の人々の特色としてあげていることは、主観的で、個人的で、貴族的で、己惚れが強いということである。そのような彼等の手になる人工的な着色をほどこした詩よりも、本然（ナチュラル）な作品を望み、その可能性を進歩派の人々の

中に見ている。

福士はさらに翌四月の「詩歌」で、彼の論究を進め、神秘主義を再び正面から攻撃する。なにかの驚異を人間が感じたとき、神秘と直ちに結びつけては冷静な判断ができない。神秘は畸形であり、正常な判断を疎外する。神秘は文明の進歩を妨げるものであり、詩にとって有害だという。

同じ文章の中で、川路柳虹と山村暮鳥についても論じているが、川路に対して、賞めるとすれば之れ（地上頌歌 佐藤註）を後來の詩の爲めに出した記念的な宣言の詩といふ以外に、無理にも賞められない」といい、また「川路君の今度の詩は表現という事にこの眞摯な神經質なもの（自分の感性にびつたりした表現を得るまで氣を配ること 佐藤註）が随分足りないと思はれる節がある」とまでいう。これではまるで、ひとり相撲を取つていた彼が、特定の名をあげて相手を土俵上に上げようとしているごとくである。

これほどまでいわれて、対立派のひとりとして川路柳虹は、ようやく五月号「詩歌」に反論をのせた。柳虹の文章は、初めから反感をむき出しにしている。彼は福士の欠点をよく見ており、少し筆が走りすぎて揚げ足取りになっていさえる。そのため、象徴とか神秘とかいったものの実体を、彼がどのように理解し、なぜそれらが詩に必要であるのかといった、一番重要な点が等閑にされている。柳虹は自己を弁護するよりも、相手の理論の欠陥を追求するのに懸命である。

この大正六年五月には、萩原朔太郎が三点ばかり文章を発表し

ている。ひとつは「朔太郎の感想」という小さなものであり、他は「調子本位の詩からリズム本位の詩へ」と、「三木露風一派の詩を放逐せよ」という論文である。なかならず最後の文は、論じる相手の名を題名にあげて直接攻撃しており、この文章が書かれたことによって、詩壇論争は一段と活発化した。

「朔太郎の感想」では、自己の立場を「貴族主義者であり、おまけに象徴主義の表現手段を信奉している作家の一人です」と述べ、*「民衆本位の作家でもなければ人生派でもない」*と、福士等との立場の違いを述べている。彼の貴族主義とは、人生が生命維持のため機械的に運行しているのではなく、無駄とか、余裕とかを積極的に肯定することによって、生活の豊穡さが生まれるということである。

「調子本位の詩からリズム本位の詩へ」という文は、直接論争を意識して書かれたものではない。しかし次のような主張が見られる。三木露風の詩に文語のリズムが見られたが、それは既に過去のものである。口語詩では、北原白秋あたりからリズムがあらわれはじめ、今発達の過程にある。今後は口語詩のリズムを伸ばすように努力すべきであるといひ、やはり露風批判が見られる。

「三木露風一派の詩を放逐せよ」は、以上の二篇にくらべて非常に重要である。北原白秋の『思ひ出』は、日本象徴派の念願であった情調本位の抒情詩を完成したが、時が立つにつれて甘ったるく感じられるようになり、より強い思想性をもった詩が望まれた。この情調本位に対する反発として生まれてきたのが、三木一派の作品である。しかしそれらの詩にみられた思想（象徴とか神

秘）は、実は空虚なまやかしさであり、白秋などに比べてほんの少しだけ観念的であつたにすぎない。彼等の神秘は、西洋の詩人がさんざんうたつた黄昏の光景とか、月光とか、晩鐘とか、森のニンフとかいった古典的で類型的で陳腐なものであつた。そこには象徴と呼ぶべき何物もなかつた。もちろん思想などと呼ばれた代物ではない。ただ、思想らしいものや、哲学らしいものだけがあつた。ようするに曖昧で、不要領で、中途半端な言い回しを使つていたにすぎない。福士が「文章世界」三月号で、彼等を高尚で貴族主義的であるとしてゐるのは明らかに間違いで、*「解るものを解らなく見せるために解らなくなつた」*のである。そのため詩が民衆から離れ、彼等が詩壇の主流であることによって、詩壇全体が蒙昧であると識者から賤辱された。以上のごとき三木派に対して、新しい詩人の動きが活発になつてきた。それは中庸党とか、過激党とか呼べる人々である。と、このように述べてきて、詩壇の色分けをおこなう。

三木派または保守派と目される人々には、三木露風・柳沢健・西条八十等に、評論の灰野庄平・山宮允がいる。

川路柳虹は三木派ではなく、どちらかというと感情本位の情緒派であるが、表現が古風であることと、陳腐な情調をうたうために一般的には三木派に入れられる。

中庸派は「情緒や主題の取り扱ひ方やその態度や趣味や、又はその詩の表現手段」が、どこか保守派に似ている人々である。この派の日夏耿之介は、「メーテリンクなどの系統をひいた、新しい近代的神秘思想」家で、貴族主義の高踏派である。また白鳥省

吾と富田碎花は人生派である。

過激派には、理智的な傾向をもった旧「自由詩社」の福士幸次郎・山村暮鳥・加藤介春と、純然たる感情中心主義の「感情派」の室生犀星・萩原朔太郎がいる。それに高村光太郎・百田宗治がこれらに加わる。

この朔太郎の現状に対する分析と分類はかなり正確であり、同時にかなり痛烈であった。福士の「現今詩壇に対する私見」と、この朔太郎の文によって、三木派を攻撃する火の手は、消しようのないくらい烈しく燃えあがったのである。

いつの時代においても、中心の思潮が正しいとは限らないが、インサイダーに対して反抗を試みることは勇気を要する。福士の批判も激しかったが、それでもこの時の朔太郎ほどではない。福士の文には、どこか自信のなさがあり、遠慮も見られた。朔太郎のほうには、そのような点がまったくなくない。彼の自信は、二月に出版した処女詩集『月に吠える』^{註2}の好評によって生まれたのである。それにしても、新人の文章としてかなり大胆で、反響も大きかった。今日、象徴主義と神秘主義に関する論争が、この朔太郎の文によって初められた如く思われているのは、反響の大きさによって引きおこされた錯覚であらう。翌月の「文章世界」に、一読者から「感情派の詩を葬れ」と題した文が寄せられていることでも、反響の大きさが知られる。

また、朔太郎の文は、約一年前に「輓近の詩壇を論ず」として、柳沢健が白秋を批難したことに対する報復の意味もはたしていた。

註1 「現今詩壇に対する私見」で、福士は自己を本然派と呼ん

でいるが、前月の「詩壇月評」では、本性主義といっている。彼自身、明確な認識をもって述べた言葉ではない。

2 月に吠える 萩原朔太郎 大正6年2月白日社・感情詩社
共刊

五 展 開

翌六月の「詩歌」では、論争の当事者福士幸次郎・川路柳虹・白鳥省吾の文を一度に掲載し、それぞれの反論を述べさせた。いよいよ論争は、内容といい、外観といい、佳境に入った。前年九月に同誌上で試みた特集が、激しい論戦として再現されたのである。

福士は「川路君に答ふ」として、川路の五月の文を論じ、神秘主義を排斥する理由をさらにはっきり述べる。神秘主義がはやるのは文明の遅れた地域であり、文明国には神秘主義などありえない。日本で神秘主義が云々されるのは、半文明国だからである。神秘なるものの実体は、問題にすることもないようなちよつとした異常な出来事であり、肉体の変調によってもたらされ、思想とは無縁な代物である。しかもそれは一種の畸形であり、不具であって、常人に寄与するなものもない。川路や三木は、インスピレーションとか、虫の知らせとか言うべきものを、暗示とか啓示とかいって、曖昧にし、難解にしているにすぎない。

福士は自然界に起こる不可思議が、科学の発達とともに物語的に解明され、人間生活に起こる異変が心理学や精神医学によって

解明されるものと信じている。つまり彼の抱いていた神秘観は、人間の日常的な知識の範囲内にとどまっていたわけである。

この福士の文章は、川路に直接送られ、川路もすぐ反論を書いて、二つの論文を同時に誌上に載せた。それが「再び福士君に申す」である。

ここで柳虹は、自身神秘主義者ではなく、三木達とむしろ反対の立場にあるとまず述べる。彼のこの前提は、萩原の分類が正しかったことを証明する。柳虹の論は前にも指摘しておいたように、いささか瑣末的になるきらいがある。福士の文が未整理で、意味がとりにくく、論旨が明確でないことも確かであるが、その一方、真面目さと真剣さに溢れている。それに比べると柳虹の反論は、問題意識がいささか稀薄である。これはおそらく、この前提に基因しているのであらう。

彼は「思考は現実をきはめるほど現実の容態に遠ざかり、その時ほど『現実を視、現実を創造してある』と述べ、さらに『思想は一度この現実の奥秘に徹してこそ真実の姿をえるものである事を確信している』という。これではどうもはつきりしないが、おそらく、現実の探究とは実想の探究ということであり、実想を象徴化して描くことによって、詩が神秘的になるというのである。彼自身の思考も、この段階ではまだ未整理に思えるが、前に比べるとはつきりしている。

つぎに白鳥省吾の「根底なき詩論を排す」を見よう。こちらは萩原を当面の矢面にして論じている。省吾の文にも、揚げ足取りに見える個所がないわけではないが、ひとつひとつの反論は、か

なり核心を深く突いている。彼も三木とは反対の立場にいるが、象徴主義と神秘主義を否定する者ではないという。省吾の詩風の変化について考え合わせれば、当然理解できる主張である。

白鳥は萩原の神秘観が、前世紀的であると非難し、近代に生まれた神秘思想は、萩原のいうように月並で類型的なものではなく、深遠な生命感の衝動の産物であるという。

現代の神秘にはロマンチックの傾向から一たび現実の苦い経験を経て來て科學的精神に陶冶せられた後の神秘がある。自然主義懷疑思潮といふ痛烈な人生の経験と試練とを経た後に現はれた神である。だから神秘と言つても昔の夢幻空想から出た神秘ではなくして近代の懷疑に根ざして更に一步深く進んだものである。現代に於て作家の主觀そのものが官能的神經的に鋭敏になつて新しさと深さを考へてゐる。(中略)

私より言はせれば神秘は白日にもある、早い話が人間が生れた、自分が生れたといふことが既に神秘ではないか、自分の死後も亦神秘ではないか、この神秘の背景を痛感してこそ眞に人間としての感動があるのである。

この考察は、近代の神秘思想についてかなり正確な見解である。論争もここまできて、ようやく神秘の概念が定まった感がある。省吾の意見はこのようにまとまっていたが、他の人々はこれを理解せず、ぜんぜん受け入れなかった。また彼が肯定する三木露風の神秘思想にしても、前世紀的な神秘観をもっているだけで、決して省吾の説く神秘ではなかった。露風の作品においてはなおさらのことで、どちらかといえば、朔太郎の幼稚とも見える

神秘観の方がかえって適合していた。もちろん省吾の意見にしても、欠陥がないわけではない。

近代の藝術から神秘を除いて果して何が残るであらう。私は敏感——藝術的天分——神秘を感ずること——この三つを同等に思ふ位である。

とまでいうに至っては首を傾げたくなる。しかし、大正六年という時点で考えれば、彼の把握はかなり正確である。省吾は文の後半で、朔太郎の詩も彼の神秘という概念の中に入り、さらに反三木派のほとんどの人々も、この概念で括ることができると述べている。だが、このすべてを包括し得ることは、富士や萩原が三木派を排斥する真の意味を理解していないことにもなる。むしろ、このような見解は見解として、省吾が同じ文中で述べた三木露風の詩に「生命の諧調のない」理由を、同時に披瀝しておくべきであった。

以上三人の意見の同時発表は、詩壇外部からも相当に注目された。大正六年六月は、論争の山場であった。萩原朔太郎も同月「感情」で、富士の神秘観に異議をとнаえ、彼自身の見解を次のように述べている。

私はどう考へても「詩」といふものに神秘性を發見することができない。詩はただ人間のある場合における特異な心理状態にすぎない。いつさいの幻覺や錯覺の如き者も畢竟は生理上のある變態作用にすぎない。要するに詩は「孤獨者の心のなぐさめ」にすぎない。

萩原の神秘は、詩作とただちに結びつかなかった。右のごとき

考えからすれば、詩を神秘的にすることは、單に曖昧にすることにすぎず、この意図があるかぎり、観念的な作品が生まれる。彼の否定しているのは、神秘主義ではなくして神秘的な詩である。彼は詩作を、漠然とした詩興といったものの作用としてではなく、人間の生命に直接かわる行為として認識したかったのである。

翌七月同じ「詩歌」に、富士は「再び川路君に答ふ」を書いた。ここで幸次郎の神秘観は、かつての考えから移動している。もちろん、生命の神秘といったことは首肯していない。ただ次のようなところがある。

ミステリとは一体何ぞ。神秘とは一体何ぞ。現實の背景には神秘がなくして却て悲劇がある。僕等の智性は即ち此の悲劇にぶつかる。

彼には、人生の悲劇性が神秘に代置される概念であった。このような代置をすることは、論争相手の主張に意義を認め、機械的にのみ神秘を考えていない証拠である。同時にこの考えの中に、神秘を排斥する理由もみられる。

彼はいう、人間生活に起こるさまざまな事象を神秘という概念に入れたのでは、現実の眞の姿を見失う。特に人間がおかれている悲劇的な様相に、神秘という言葉をあてはめてこと足れりとするのは、あまりに樂觀的な人生觀であり、現實生活の苦悩に対して、なんら救いの力を与えることができない。そのような人生に対する姿勢よりも、現実の悲劇的な状況を深くみつめて、なおかつ苦悩の底にある愛に気付かなければならない。深奥にある愛を

知ることこそ、現実生活を神秘といった観念に転化せず、直視する態度である。

福士の考えは、少々飛躍が激しいが、近代詩の動向が新展開する姿を暗示している。最初に述べたように、象徴詩の運動は既に完成しており、露風や白秋の現実活動がどうであれ、彼等の詩史上の位置は定着しかけ、過去の人々になりつつあった。しかし詩壇にはまだ彼等の残存物が多かった。福士はそれらの一掃を考えていたのであらう。世代の交代は、交代しなければならぬ必然性があり、理論があり、作品があったのである。

註1 文面は、萩原朔太郎に対する反語的な言い廻しをしている。今、繁雑になるため整理した。それ故、正確な原文通りではない。

論争資料(1)

(大正)

- 4・2 詩歌月評 川路柳虹「未来」
- 4・7、8 輓近の詩壇を論ず 柳沢健「文章世界」
- 4・9 露風詩話 三木露風 白日社刊
- 4・9 感想 室生犀星「感情」
- 5・6・8 詩の庶民的傾向 白鳥省吾「読売新聞」
- 5・8・8 詩の純一性に就て 室生犀星「読売新聞」
- 5・8 詩作の傍より 三木露風「詩歌」

- 5・9 詩人と智識 福士幸次郎「詩歌」
- 5・9 感動と陶酔と自覚 白鳥省吾「詩歌」
- 5・9 最近の詩壇に就て 萩原朔太郎「詩歌」
- 5・11 詩壇毎月評論 福士幸次郎「詩歌」
- 5・11 日本に於ける未来派の詩とその解説 萩原朔太郎「感情」
- 5・12 詩壇九人集を読んで 川路柳虹「文章世界」
- 5・12 詩壇九人集を論ず 柳沢健「文章世界」
- 6・1 昨年の詩壇を論ず 萩原朔太郎「秀才文壇」
- 6・2 詩壇月評 太陽の子「詩歌」
- 6・3 現今詩壇に対する私見 福士幸次郎「文章世界」
- 6・4 詩壇月評 太陽の子「詩歌」
- 6・5 福士君に申す 川路柳虹「詩歌」
- 6・5 朔太郎の感想 萩原朔太郎「感情」
- 6・5 調子本位の詩からリズム本位の詩へ 萩原朔太郎「詩歌」
- 6・5 三木露風一派の詩を放逐せよ 萩原朔太郎「文章世界」
- 6・6 感情派の詩を葬れ 川上操「文章世界」
- 6・6 川路君に答ふ 福士幸次郎「詩歌」
- 6・6 再び福士君に申す 川路柳虹「詩歌」
- 6・6 根底なき詩論を排す 白鳥省吾「詩歌」
- 6・6 朔太郎の感想 萩原朔太郎「感情」
- 6・7 再び川路君に答ふ 福士幸次郎「詩歌」

(以下次号)